

神杉 靖嗣 提出 学位申請論文（課程博士）

『幕末から昭和前期にかけての国学者・神道人の神観念』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、「幕末から昭和前期にかけての国学者・神道人の神観念」と題し、幕末維新期から昭和前期にかけての国学者・神道人の主に天之御中主神をめぐる神観念を分析したものであり、序章と終章を含めた全九章で構成されている。

すなわち、本論文の意図・目的等を述べた序章、本論文の第一部とでもいうべき第一章から第四章までの明治初期における政府の教育及び神祇・神道教化を担当する機関である皇学所や神祇官・宣教使などを拠点に活動した国学者・神道人を取り上げた論考、第二部に当たる第五章から第七章にかけての明治後期から昭和前期にかけて再び浮上してくる天之御中主神をめぐる神観念を論じた神道人を扱った論考、そして最後に本論文全体を総括した終章で構成されている。

序章「幕末から昭和前期の国学者・神道人の神観念の把握にむけて―本研究における課題」では、本論文の目的と課題が述べられおり、幕末維新期という近代日本をもたらした激動の時代に、神道を代表する神であり「最高至貴」とされる天照大神とともに『古事記』冒頭に登場する「造化三神」のうちの二柱である天之御中主神を最高神とする観念が台頭してくる背景、そして結果的には昭和前期に至ってもその神観念が普及・定着しなかったことの経緯・要因等を研究することの必要性・重要性が説かれている。また、序章には本論文を構成する各章の概要も記されており、読者の利便性を考慮したものとなっている。

第一章「松代藩士長谷川昭道の皇道理論」では、佐久間象山と並んで幕末維新期の松代藩を代表する儒学者であり、「皇道」学者として藩政や維新政府の学校行政に重要な役割を果たした長谷川昭道が展開した異色の神観念が紹介・分析されている。長谷川昭道は岩倉具視が主導する明治維新政府による学校設立運動に尽力した人物として著名であるが、一般的には国学者・神道人の範疇に入らない学者と見做されている長谷川には、天之御中主神論を最高神に据える

思想が存在していることを、昭道の人物や皇道的思想などについて種々の資料を用いて詳細に検討し、現在の長谷川昭道研究の基礎を作った飯島忠夫の研究を参考にし、昭道の『皇道述義』を主たる考察の対象として昭道の神観念を分析している。

論者によれば、昭道の神道説には天之御中主神・高御産巢日神・神御産巢日神と国常立神・宇麻志阿斯訶備比古遲之神・天之常立神をそれぞれ同一神の異名であるとするなど、神の解釈・理解において根拠のない牽強付会的な側面が存在することも確かであるが、昭道の学問に対する基本姿勢には根本的な「神皇ノ太学」、すなわち「皇学」を中心に据えるべきという思想・信念があり、神観念と儒教的思想を昭道自身の世界観として再編成していると論じている。また、当時の時代背景における昭道の神道論は、神道を「皇道」へと転換・発展させる皇道論の構築に向けての神道論の近代化ともいうべき側面を有している」と評価する。さらに論者は、昭道の神道論・皇道論における最も重要な点は、天照大神を中心として最大限尊崇すべしというのではなく、「皇太祖天之御中主

天皇」から現在に至るまでの皇統の系譜を現実世界の秩序の中心として信仰・尊重すべしというところにある、と指摘している。そして、その意味では、昭道の神道説は天照大神一神に収斂するのではなく、「皇太祖天之御中主天皇」と太陽を根元とする皇統の系譜に行き着くというのであり、太陽と天之御中主神を中心として天皇に結び付ける独特の神道説・神観念である、と結論づけている。

第二章「杵築の国学者・物集高世の神道論―伊弉諾尊・伊弉冉尊観を中心として―」では、明治初期に宣教使の官員であった豊後国杵築藩出身の平田派の国学者・歌人である物集高世の神観念が分析の対象とされている。物集高世の神観念を考察・分析するためには、高世の神観念を知る上で最も重要な著作である『神道本論注解』を丹念に読み込むことが必要との認識から出発し、当該著作において高世は、伊弉諾尊・伊弉冉尊二柱の神に関して、天地万物を創造し、教えを最初に広める役割も担った神と解釈し、神道古典に記載がないものも含めてこの二神の役割を極めて大きなものと見ており、それは高世の後の著作『宣教講本』、『祓教六日間考』に至っても一貫している、と述べる。

また、その神道論については演繹的であり、必ずしも古典に忠実ではないとの批判もあるが、高世の神道論は平田篤胤の神観を基本的に引き継ぎながらも、特に伊弉諾尊・伊弉冉尊に多くの役割を与えたことで神道思想史上でも非常に独特であり、神々のヒエラルキーにおけるそれぞれの役割を措定した上での多神教を基本とした独自説の一つの形であり、当時の時代状況を色濃く反映するものであると論じている。

第三章「平田派国学者の神観再考―渡辺重石丸の天之御中主神観を中心に―」では、幕末維新期における天之御中主神をめぐる専論として有名な『天之御中主神考』の著者であり、明治初期に皇学所教官や教部省官員等を歴任し、後の「久米邦武筆禍事件」でも有名な平田派国学者の渡辺重石丸を取り上げている。

渡辺重石丸の天之御中主神論は、村岡典嗣の古典的な研究以来、キリスト教や朱子学の影響が指摘されているが、それはやや皮相的であるとして、重石丸の「神論」の本質を知るには、キリスト教などとの影響関係だけでなく、天之御中主神中心論であっても結論的には「天皇」に「孝道」を尽す、また幽冥を

論じる部分にあってもこの世で善をなし道徳的に生きるべしという形で現世的道徳論に重点を置く点にあることにこそ視点を据えるべきと主張。その上で論者は、重石丸の神観念にはその根底に現世的傾向が強くなり、「神論」の形をとってはいても、実質的には「国体論」・「道徳論」としての趣・傾向が強いと結論づけている。

第四章「国学者鈴木雅之についての一考察―『撞賢木』を中心として―」は、農民出身の異色の国学者である鈴木雅之が取り上げられている。草莽の国学者としての鈴木雅之の存在は早く村岡典嗣の紹介によって知られるようになり、後に伊東多三郎や伊藤至郎の研究によって広く知られる存在になった人物である。

鈴木雅之は下総の一農民出身でありながら国学を学び、明治維新政府に於いては当時の官立の大学校の少助教や宣教使の権中講義にも就いた人物であるが、明治四年に三十五歳の若さで死去している。そのこともあって、雅之の神観をめぐる研究には文献上の制約もあるのであるが、論者は雅之の主著である『撞賢木』を主たる考察対象として雅之の神観を分析している。

論者は、『撞賢木』の検討・分析を通して、雅之の天之御中主神をめぐる論考は平田篤胤以降の天之御中主神観の一つの到達点と捉えることが可能であることを解明し、さらに、論者は雅之の思想的な世界観の根本をなしているのは「生成の道」であり、その神観における「道」の具体化・日常化の側面は、外見的・表面的には儒教倫理に近いようでありながら、信仰を基礎として神道を宗教的に深化させたという意味で儒教道徳とは異質であると論じている。

第五章「別天神論争」と星野輝興の神道学説について」では、昭和十七年に起きた、神道界をはじめ様々な民族主義・国粹主義団体等を巻き込んだ、いわゆる「別天神論争」（神典擁護運動）に関連して、当該事件の当事者である宮内省掌典の星野輝興の神道論・神観念が取り上げられている。論者は、星野の神観念は高天原を地上の現実的な場所として措定しており、高天原の神聖性と天皇の權威の源泉を天照大神との関連以外に一切認めないものであるとし、その祭祀実践者としての信念からきたと思われる神道説は、平田篤胤以降の神道思想家の宇宙的にスケールが広がった神道論からみると異端的であると評価している。

次いでその理由・背景として、星野の神道説は元々人格神である天照大神を最高の民族神として天皇の権威の源泉として確立するという意味で、当時のナチス流の軍人精神にも、神道非宗教論の内務省の官僚にも親和性があったと思量される。ゆえに、軍部や文部省・内務省などの官僚の一部の支持を受け、一時的にせよ神道思想統一の基準とされたのではないかと推測している。

第六章「星野輝興の天照大神に収束する神道学説をめぐって」では、前章で言及されている星野の神道説を再検討すべく、星野の神道説に対して最も先鋭的な批判を遂行した、当時の代表的「日本主義日本哲学者」である松永材の「星野説の根本動機」を通して、星野説の特徴を把握し、星野輝興の神道説のみならず星野輝興自身の歴史的立場づけについて分析している。

この分析の結果、論者は、星野説は昭和十年頃から発表され、その後終戦まで変化がほぼ見られなかった点に注目し、非常時の中で自らの信念を一般人まで含めて広く吐露し、積極的に時代と関わった面が強いとも見られる。だが、むしろ、星野を加害者として政府の神道思想統一に協力した者というよりは、

政府に一時的に利用され、政府の脅威となりえた反政府運動の拡大という事態になると切り捨てられた、時代に翻弄された者と捉えなおすのが妥当ではないか、と結論する。

第七章「今泉定助の三位一体の天之御中主神論」では、幕末に生まれ昭和まで活躍した教育者・国学者・神道思想家である今泉定助が取り上げられている。

論者は、東京大学古典講習科入学以来、新進気鋭の若き国文学研究者として出発した今泉定助が、明治期から昭和初期にかけて活躍した神道家の川面凡児との出会いを経て以降、今泉の神道説は「禊、祓、鎮魂」をそれぞれ霊魂観によって基礎づけ、思想的に深化していく過程を検討している。その過程において、今泉の神道説は、各々の絶えざる個人的な自己修養をもとめる意味で中心回帰的であり、天皇を中心とした秩序のもとでの絶えざる生成発展を求める意味で派生的なものとなったこと、それは、宗教的でありながら、それを超えようとし、道徳的でありながら、それには止まらない神道説となったことを述べる。そして、結論的には、今泉の神道説は、「生成発展」・「修理固成」の思想を核としながら、

道徳的・哲学的な様々な思想と自己修養、霊魂観などが伏線的に潜在しており、このような神道思想の延長線上に主張されるのが、最終的な皇道による世界救済を目指す「世界皇化」ではなかったのかと論じている。

終章「近代の国学者・神道人の神観念が示唆するもの」では、本論文における各章の論者自身による「結論」と本論文全体への総括が述べられている。

論文審査の結果の要旨

「幕末から昭和前期にかけての国学者・神道人の神観念」と題する本論文の目的は、幕末から明治初期にかけて活躍した長谷川昭道、物集高世、渡辺重石丸、鈴木雅之、そして明治から昭和前期にかけて活動した星野輝興や今泉定助などの「神観念」を、主として天之御中主神との関係で検討・分析し、近代における多様な神観念の諸相とその展開を明治初期及び昭和前期それぞれの時代状況との相関関係から把握しようと試みた、他にあまり類例のない意欲的な研究である。

『古事記』冒頭に登場する天之御中主神を重視する神観念が平田篤胤によって提起されたことは、大正九年に村岡典嗣が「平田篤胤の神学に於ける耶蘇教の影響」で指摘して以来の通説であるが、本論文はこの通説を基本的に継承しつつ、天之御中主神観が幕末維新期の平田派国学者等を中心に論じられるようになり、ついには明治維新政府による大教宣布運動で天照大神をも凌ぐほどの中心的性格にまで上昇したのかについて、まずはその背景・要因を当時の時代状況を見据えながら前記国学者等の神観念の検討・分析を通して解明しようとしている。

ここまでなら、一般的に見られる明治初期の国学をめぐる思想研究の域を出ないのであるが、論者の関心はそれだけに止まらないところに本論文の特色と意義がある。それは、明治八年設立の神道事務局神殿の祭神奉斎をめぐる「祭神論争」が明治十四年の勅裁による決着によって、天之御中主神は「表舞台」から一旦姿を消すのであるが、しかし、昭和時代に入りその伏流して潜在していた天之御中主神を中心にした思想や信仰が再び「表舞台」に姿を現すことになるとする、論者独特の歴史的事象への関心に立脚した視点である。

この視点からの近代神道における神観念の変遷過程やそれに係る顛末を考察した研究は、長年にわたり明治期の天之御中主神論研究を遂行してきた佐々木聖使が唯一であるといっても過言ではない（佐々木『天之御中主神のゆくへ―近代的神観の確立と葛藤―』、龍声社、平成二十五年）。無論、本論文もこの佐々木の研究成果に大きな刺激や影響を受けていることは確かであるが、佐々木が対象としていない時代、すなわち天之御中主神が再び「表舞台」に姿を現すことになる昭和前期に、宮内省掌典として活躍した星野輝興と、今泉定助や日本主義哲学者の松永材等との相異なる神観念をめぐる対立・相克を通して、近代の国学者・神道人の神観念の実態を浮き彫りにしようと試みた点は、従来の近代神道思想・神観念に関する研究の欠落部分を補うものとして大いに評価すべきと思慮する。

ところで、天之御中主神は、『古事記』冒頭における「造化三神」の一柱であるが、最初の出現以後は『古事記』にも登場せず具体的事蹟も不明である。故に、論者も指摘するように、現代に至るまでの『古事記』研究の基礎を築いた本居

宣長でさえも天之御中主神に関しては語義・語釈のみで、その神格等については語っていない。その天之御中主神の存在が重視されるようになったのは、前述したように平田篤胤以後のことである。そして、この平田篤胤以降、その影響を受けた神観念は幕末維新时期において広く普及・浸透し、明治維新政府の神祇政策や国民教化政策にも大きな影響を与えることになったことは、これまでの幾多の先行研究から明らかにされている。それ故、本論文で論者も言及・指摘しているように、明治初期の大教宣布運動の時代には、国家的な神観念・教義としても『記紀』などの古典解釈は天神造化説が有力な位置を占めるようになったのである。

しかし、そのことが直ちに『古事記』で最初に出現した神である天之御中主神を天照大神に対抗して最高神の位置にすえ造化三神を重視する神観を政府が全面に押し出したことを意味するものではない。というのも、明治四年十二月の左院による教部省設置建議には「恭シク惟ミルニ天之御中主神ハ開元造化ノ主神ニシテ天照大神ハ我皇上ノ祖神」などと謳われているように、当時の政府

にあって造化三神重視路線を強力に推進した左院においてすら天之御中主神と天照大神は対抗関係にあると考えられていたわけではなく、いわんや天之御中主神か天照大神かといった二者択一的な神観念に囚われていたわけではない。この点を論者がどの程度深く認識して立論しているのか。これは論者が本論文で扱っている昭和十七年の「別天神論争」にも直接・間接に関係する重要な点であり、論者は最小限ではあっても言及すべきであったと思慮する。

以上、本論文の総体的構成と内容には、評価すべき点とともに前記したような欠点があることを見てきたが、以下では、本論文でも最も注目すべきと思われる第一章の長谷川昭道の神観念に関する論考を多少詳しく検討してみよう。

まずは、そもそも長谷川昭道が何故に「国学者・神道人」として扱われなければならないのか、訝しく思う向きもあろう。しかし、戦前では大久保利謙が明治初年の学校設立問題に関して、長谷川を「国学系」としているし、また戦後でも島蘭進も、長谷川が提唱した「皇道」論を一種の神道論としている。こうした論を踏まえて、論者は長谷川を「皇道」論を説いた広義の神道人の範疇

に入れ、その独自の神観念について分析している。

長谷川に関する研究はさほど多くなく、これまでも戦前の飯島忠夫の先駆的業績や戦後の沖田行司による教育史からの研究、あるいは佐々木聖使の近代神道思想史からの研究があるぐらいであり、長谷川の神観念に的を絞った本格的な研究は皆無と云っていい研究状況である。その意味でも、論者による長谷川の本格的な研究は意義のあるものと評価されよう。

論者は、長谷川昭道を広義の国学者・神道人として、その独特の神道説、すなわち天之御中主神・高御産巢日神・神御産巢日神と国常立神・宇麻志阿志詞備比古遲之神・天之常立神をそれぞれ同一の神の異名であるとする説を紹介し、その根柢には「彝倫」を重視する姿勢があることを重視し、長谷川の「皇学」を単に「国学」と同様に見做すことは出来ないかと論じている。この点の考察は本論考の中でも最も評価すべきものであるといえよう。すなわち、論者は「皇道述義」を詳細に検討した上で、長谷川のいう「皇学」とは「国学」や「儒学」、「洋学」などの「一国一人の学」ではない「天地人の大学」であるという「戸隠

舎遺稿」での言、あるいは「皇道述義」に記されている「神皇の道を皇道と称し、其法を皇法と称し、其学を皇学と称す」という言に着目し、長谷川の唱える「皇学」は「彝倫を明らかにする」学問であり、「皇学」と「国学」とは同一視出来ない」と論断する。この指摘は極めて重要な指摘であるが、他方、論者が長谷川の皇道論・皇法論・皇学論における重要なキーワードと捉える「彝倫」という語句が、長谷川自身の独自性・意味内容を有するものであるかどうかについての分析・言及はなされていない。「彝倫」という語句は伊藤仁斎など近世の儒学者も使用していることを勘案するならば、それとの比較検討の上で長谷川の用法の独自性にも言及すべきであり、そうすることによって本論考はより充実した厚みのある長谷川昭道論となったと思慮する。

長谷川昭道の神観念に続いて、論者は第二章で物集高世、第三章で渡辺重石丸、第四章で鈴木雅之といった国学者のそれぞれの神観念の諸相を考察している。このうち、渡辺重石丸や鈴木雅之に関しては、戦前から現代にかけてある程度の研究蓄積があり、本論文でも参照・吟味した上での論考となっている。中でも、

渡辺が天之御中主神を「創造神」として捉え、平田篤胤の「万物主宰神」説を一步前進させたという指摘は、当時の平田派国学者の「師説祖述・墨守」に止まらない一面を示すものとして重要な具体的指摘と評価できよう。

次いで本論文で注目すべきは、第二章の物集高世の神観念についての考察である。物集高世は国語学者・歌人として知られているが、近年になって物集の神道論に関する著作が奥田恵瑞らによって新たに翻刻・紹介され、また秋元信英らによる物集の思想的研究も進展している。

論者はこうした研究動向に刺激を受け、物集の神観念についての代表的著作である『神道本論注解』を丹念に吟味し、物集が伊弉諾尊・伊弉冉尊二柱の神について、天地万物を創造し、教えを最初に広める役割も担ったと解釈していることを明らかにしている。そして、さらには神道古典に記載がないものも含めて、この二神の役割を極めて大きなものと考えていたと論じ、それは物集が後に著わした神道関係の著作である『宣教講本』や『祓教六日間考』に至っても一貫していることなどを実証的に説明している。また、物集の神道論は演繹的であり、必ずしも古

典の記事に忠実ではないが、その神道論には平田篤胤の神観を基本的に引き継ぎながらも、特に伊弉諾尊・伊弉冉尊に多くの役割を与えたことは神道思想史上でも非常に独特であり、神々のヒエラルキーにおけるそれぞれの役割を措定した上で多神教を基本とした異色の神道説であり、宣教使官員として「わかりやすい教義」を確立しようとした、大教宣布時期の時代状況を色濃く反映した独特の神道論であると論者は指摘する。これも重要な指摘と評価できよう。

以上見てきたように、論者は長谷川昭道、物集高世、渡辺重石丸、鈴木雅之を主な考察対象として、それらの神観念を検証した結果、これら四人の神観念にはいずれも共通性と独自性が存在することを明らかにしている。このこと自体は評価すべき作業であるが、しかしながら、それだけでは時代状況との相関関係の十分な解明にはならないのであり、単に多様な神観念が個々の国学者・神道人に存在した、という至極常識的な結果論の提示に陥る可能性も否定できない。これをどう克服するか。論者にとっては、今後の最も重要な検討課題であろう。

翻って考えるに、いかなる思想や観念も時代状況との関連を無視しては語れな

いし、思想自体がそれぞれの時代の産物であるとするならば、当該思想が時代を
超えて存続・発展していくこともあれば、またその時代だけに終わってしまうも
のもある。それでは、論者が本論文で扱っている天之御中主神をめぐる様々な神
観念はどうか。これが、本論文で究極的に問われるべき最大の問題であり、
第五章から第七章にかけての論考がまさにその問題に対する解答となる。

幕末維新时期以来の多様な神観念は昭和前期に至るまで存在し、その神観念を代
表する今泉定助流の天之御中主神重視論や、それに真っ向から対抗する星野輝興
などの天照大神重視論も、いずれも一見したところ二者択一的な、謂わば「一神論」
的の神道思想であり、それは昭和前期の「非常時」という時代に翻弄され、ついぞ
どちらも国民的信仰を獲得し得なかった神観念ということになる。これを明らか
にしたことは論者による一応の解答ともいえようが、未だ不十分である。

しかしながら、その明確な解答に向けての萌芽は本論文のあちこちに散見さ
れる。例えば、昭和十七年の「別天神論争」に関連して、星野輝興が高天原を
地上の現実的な場所として措定し、高天原の神聖性と天皇の権威の源泉を天照

大神に求める神道説は、平田篤胤以降の神道思想家の宇宙的にスケールが広がった神道論かすれば異端的である旨を論者は述べているが、前記した左院建議に見られるように天照大神を重視する神観念は天之御中主神を重視する神観が台頭してきた明治初年以降も確固として存在した。その点を論者がより精緻に考察することが、薩摩藩で天之御中主神が重視視されたこと、長州藩では天照大神が重視されたことの歴史的背景を探る研究へと繋がり、本論文で得られた成果をより発展させる研究となるであろう。

これまで見てきたように、本論文には評価すべき点も少なからずあるが、また研究論文としての問題点もある。例えば、検討すべき先行研究の多くが注記で処理されているという点である。無論、論者が扱っている内容と人物をめぐる研究蓄積が少ないことは事実であるが、だからこそ、佐々木聖使の一連の天之御中主神に関する論考や、物集高世に関する秋元信英などの重要な先行研究を本論で真正面から取り上げて検討すべきであろう。

以上、本論文には近代神道研究の上で新たな知見を提示するなど評価すべき点

も見られるが、また少なからぬ問題点もあることは確かである。だが、国学者・神道人を対象にして、明治初年以來の天之御中主神を中心とする神觀念の諸相を昭和前期にまで視野を広げて考察し、近代神道史研究に新たな地平を開こうとした点は、これまでに類例のない研究として高く評価出来る。よって、本論文の提出者神杉靖嗣は、博士（神道学）を授与されるべき資格があるものと認める。

平成三十年一月十日

主査	國學院大學教授	阪本是丸	印
副査	國學院大學教授	武田秀章	印
副査	國學院大學准教授	遠藤潤	印

神杉 靖嗣 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士
(神道学) の学位を授与される学力があることを確認した。

平成三十年一月十日

学力確認担当者

主 査	國學院大學教授	阪 本 是 丸	印
副 査	國學院大學教授	武 田 秀 章	印
副 査	國學院大學准教授	遠 藤 潤	印